

新宮山彦ぐるーぷ 第1808回

## 小瀧螺雲師主宰の山伏修行体験と高野山案内

実施日；2015年5月9日（土） 曇り後小雨

参加者；玉岡憲明・玉岡明・川島功・沖崎吉信・根木俊明・  
生熊敏男・生熊千満子・畑林秀味・畑林清子・  
大江加予子・松本邦子・中川治平・榎本康夫・  
奥村順夫・舟瀬節・田中稔明・佐藤宏子・石橋哲郎  
石橋隆子・濱野兼吉 計20名

新宮5時30分発。集合時間5時45分とあって・・・、螺雲師の指導きか、弘法大師が背中を押して下さったのか、中央通りの交差点で皆さんに拾っていただいたお蔭で、高野山にいらざなつて貰うことができました、全く感謝です。

今回は国道168号を北上して十津川村、五條市大塔町小代から左折して県道天川・野迫川線を経て高野山へ。龍神スカイラインを通るよりも、45キロ程近いとのこと。順調良く進み待ち合わせ場所の高野山大学玄関には8時前に到着。

高野山開設1200年の大法会などで、盛況で駐車場は直ぐに満杯になった。

堺市の佐藤さん、和歌山市の石橋さんご夫妻も参加され当くるーぷから20名の参加があり門前で自己紹介。我々以外に「童子の会」の方15名程の参加があり35名で行動することのこと。

9時出発であったが、駐車場が遠い所しかなく、女人堂で他の方を待つことになり、螺雲師の先導で不動坂口の女人堂に向

いました。

かつて、女人堂は高野山に八ヶ所にそれぞれあったそうですが、現存するのはここ1カ所だけになってしまったということです。女人堂の真向かいにお竹地藏様が祀られている。



高野山大前にて

小瀧螺雲師と玉岡前代表

女人堂で螺雲師説明

女人堂では、螺雲師より入峰に向けての心得、「先達の脚跡に同じ様に置き続く」「伝達事項をきちんと守る」「口伝は人に話してはならない」「師からの教えは自分のみ」の指示を授かり、師から頂いたお香で伝授の作法で躰を清め、9時45分弁天岳に向け山道を歩き始めました。同行した行者さんがホラ貝で出発の合図や進行中の合図を奏で、宗派による吹奏の違いや伝達手段としてのホラ貝の奏で方の違いも教わって、修験者気分になりました。

山道脇のチゴユリやアマドコロを写真に撮って最後尾まで下がり、高野の森の新緑を満喫しながら、同じ新緑でも私達の住む照葉樹林の熊野の森との違いがわかりました。

山内を渡る風も爽やかに大変心地よく通りぬけ、風薫る5月の素晴らしさを肌感じます。

途中、螺雲師より山に入り抖擻を行うことは、執着心を捨て裸一貫になって穢れを払うことで、不安やまよいを捨て清らかな心になる。「六根清浄・懺悔、懺悔」と叫び歩くようにとの指示があり、師の後に続いて唱和しながら10時半前に弁天岳山頂へ。山頂には嶽弁財天社があり、般若心経・天狗経を唱えた。



弁天岳登りの休憩・抖擻行とは・・・嶽弁財天社で般若心経！

弁天岳（984.5m）山頂には三等三角点があり、眼下には九度山、高野口の町並みや、紀ノ川そしてJR和歌山線があり、遠く霞んで葛城山山系が見える。師は大峰の修験も厳しいが、テントと水を持参して抖擻する葛城修験も非常に厳しい「行」である、と語られた。

弁天岳から下山し11時頃に大門へ、ここからはお大師さんの瞑想の邪魔をしないように、鳴り物は禁止されているのと、行者さん達はホラ貝等の鳴り物を仕舞う。

大門からの入場は僧侶にとつて禁忌とのこと、螺雲師は門外から私達は正面から入りました。

高野山は落雷による焼失もあり、壇上伽藍の中門は、この4月に再建され、4月2日には横綱白鵬と日馬富士の土俵入りが

奉納されたとのこと。玉岡さんは、弁天岳に登らず中門で合流。

螺雲師は、ここで行者から黒衣の僧侶装束に替え、山内の各所は中門から根本大塔、金堂の御本尊特別開帳、不動堂、御影堂など最後に金剛峯寺について、詳しく丁寧の説明と案内をして頂きました。

小雨の中でありましたが、傘を差すこともなく濡れることも気にしない真摯な姿には、師の人としての素晴らしさを窺うことが出来ました。

沢山の参詣者で金剛峯寺の案内時に、沖崎氏等は他の団体と流れて早く見学され、煙草を吸いに行かれたとのこと。奥の院口（一の橋）に未だ着かない。

午後2時過ぎ螺雲師より10分程休憩との声！朝食が早く腹ごしらえする様に言うと、一斉に精進料理の昼食。一時は断食修行かと・・・・。沖崎氏は、玉岡さんと合流し、高野山大学に駐車車で奥の院・中の橋駐車場へ移動するとのこと。



午後から法会の御影堂 奥の院一の橋にて

参道の墓碑は苔むして静寂を保ち、天に向かって聳える大きな杉木立は、荘厳そのもので霊場の雰囲気を感じながら弘法大

師廟へ歩を進める。

道を往来する人々は風を感じ、煩惱にさらされている日常から解き放され、弘法大師の徳を自らの体内に取り込んでいるのだろうか、山内の墓石は敵も味方も、宗派の違いも、洋の東西もなく、キリスト教の墓碑まで目にする事ができた。

全てを受け入れるお大師、山の鷹揚さなのか、密教の奥深さなのか、神も仏も隔たりなく受け入れてきた日本人の宗教観なのだろう。

螺雲師の高野山内でのしきたりや、懇切丁寧な説明全てを記すことはできませんが、蓮のない高野山ではシヤクナゲが蓮の替わりとして大切にされ、高野槇がお墓にさす花として利用され、お米のとれない高野山には注連縄の代わりに切り絵が、利用されて来たことなど独自の文化も育んできたことや、胎蔵界や金剛界の曼荼羅の説明には未熟な私には、十分理解できなかったとは言えませんが、それなりに学習することができました。

宗教都市としての霊場高野山の歴史、文化を学ぶことができたのは、玉岡前代表や山彦ぐるーぷが培ってきた人と人の繋がり、素晴らしさの賜であると、改めて認識させていただいた今回の高野山行でした。

弘法大師廟歩の参拝を終え、中の橋駐車場前で螺雲師の締め括りの挨拶があり解散。

運転者は、沖崎車で高野山大・駐車場へ回送。螺雲師も車で引き返され、午後5時頃、中の橋駐車場で見送って頂き、無事帰新した。

(濱野記)